

[ブーケ]

bouquet



——和紙の製作過程で、特に大変な工程はどの部分ですか？
「それはもう、全部です。一年を通して必要な作業があつて、夏は草刈り、楮の手入れ。秋冬はその枝を刈り取り、蒸します。木に傷がついたり、塵を一つずつ取り除く手作業が甘かったり、どこかの工程が一箇所でもいいかげんになると、紙に表れます」

——全ての工程を丁寧に積み重ねていくのですね。

「よい紙を作るには時間と手間がかかります。天気とも相談しなくてはならないので、大変ですよ。その代わり出来上がったものは、100年、200年と長持ちする。逆に化学的なものが入った紙は、すぐに紙の格好にはなりますが、その分すぐにだめになるので長持ちしません。よいものを作るには、必ず時間がかかります」

次世代に伝えていく「技術」

——過去に印象的だったお仕事はありますか？

「人形浄瑠璃の三味線の胴掛けの製作です。100年前から使用されていた和紙製の胴掛けがあり、その復刻に協力しました。当初は和紙の製作だけをする予定でしたが、こよりにして、それを編む作業まで請け負うことになって。指紋がなくなる仕事でした(笑)【写真③】。昔の胴掛けには穴を開けて、構造を手探りで研究しました。今回製作したものは100年使えるので、100年後に注文を受けるであろう職人さんに気付いてもらえるよう、こよりの中に製作年と私の名前を鉛筆で書き入れておきました(笑)」

——まるでタイムカプセルですね！こちらの地域の職人さんが作る細川紙は、2014年にユネスコ無形文化遺産に登録されています。

「無形文化財に指定されたのは、手漉き和紙の『技術』です。どうしても紙自体が注目を浴びますが、その背景には道具

の職人さんや、畑を手伝ってくださる地域の人たちなど、多くの方々の協力があります。そのことにはいつも感謝しています。それから、技術を残すことへの責任感は常に存在します。私たちの仕事は温故知新で、昔の人に学び、考え、それらを正確に伝えていくことが重要です。職人が亡くなった先にも、紙は残りますからね。日々今できる最善を尽くしていくことこそ、次世代へ技術をつなぐことになると思っています」

——谷野さんは学校をはじめ、博物館や美術館でワークショップも行つてらっしゃいます。子どもたちや若い人に伝えたいことはありますか？

「学校での体験学習中、子どもたちによく『紙漉き上手』と言われますが、私自身たくさん失敗して今があるわけです。紙漉き体験でうまくいかない子には『失敗してもいいんだよ。私もたくさん失敗して今があるんだよ』と伝えていきます。紙漉きは途中で失敗しても、ほぐし直せば元に戻せるんです。人生と同じ(笑)。やり直しがきくんです。子どもたちや若い人には怪我をしない程度にたくさん失敗して、経験を積んでほしいと思います」

——最後に、職人としてのやりがいや喜びを感じるのは、どのようなときか教えてください。

「作家さんたちによって『和紙がこんなふうになったんだ！』と思える瞬間です。また、依頼してくださった方の要望する和紙をきちんと作れたとき。依頼主の希望に応えてこそ、『自分は職人だ』と言えると思います」

手漉き和紙 たのに
埼玉県比企郡ときがわ町桃木42-1
TEL 04931591844 / FAX 04931591844
https://momme.net

教育芸術社のホームページで、細川紙の詳細や工房の様子、和紙の製作物を紹介しています。ぜひ併せてご覧ください。
https://www.kyogei.co.jp/data_room/bouquet/no3_nippou.html



和紙で製作されたウェディングドレス。羽のように軽いという



谷野さんの製作する和紙は、茶室やホテルなど、建築物の内装にもよく使用される。写真は「札幌・定山渓温泉 章月グランドホテル」のエントランス



【写真③】谷野さんが作った胴掛け。和紙をこよりにして纏んであり、表面は漆塗になっている(漆は漆芸・人間国宝の室瀬和美氏)。以前のものは100年間、漆を塗り直して使われてきたという



【写真②】和紙の原料となる楮の畑。むさし企画(地域の方々)も手伝っている
【写真右上】煮上がった楮
【写真右下】手漉き和紙



日本めぐり

本連載では、日本各地で文化や芸術を支えている方々にお話を伺います。
第6回は、埼玉県比企郡ときがわ町、手漉き和紙職人の谷野裕子さんです。

第6回 埼玉県比企郡ときがわ町

谷野裕子 手漉き和紙職人

今回訪れた比企郡ときがわ町は、日帰り温泉やハイキングコース、山の幸や蕎麦などが魅力的です。近隣の市や町も含めたこの一帯は自然に恵まれており、この地では古刹・慈光寺を中心に、1300年前から和紙や建具の伝統工芸が製作されています。

都幾川の水源に恵まれたこの場所で、谷野裕子さんは使用されなくなった給食センターをリノベーションして工房を営んでいます。秋の雨の日、晴れ間の見えた午後に向いました。

よい和紙を作るために

——谷野さんはいつ頃、どのようにして和紙職人の道へと進まれたのですか？

「30歳を過ぎてからです。それまでは東京の商社でシステム構築を担当していたのですが、少し疲れてしまっていたんですよね。毎日コンピュータに向かって、夜も遅くて。このまま続けたら体をこわすかしらと考えていた頃、転勤で埼玉県熊谷市に引っ越しました。休みの日にドライブしていたら、工房で和紙を作る職人さんを見かけて、『紙を作っている人がいるんだ！』と驚きました。物があれば、それ」

を作る人がいるのは当たり前なのにね（笑）。そのとき、私も土の匂いをする仕事ができたらなと思ったんです。そして、埼玉県が実施していた和紙職人の研修生制度に応募したのが始まりでした」

——現在使用されている工房は、以前は給食センターだったそうですね。

「個人の工房だと、自宅の土間のように広くない場所で、注文を受けた紙を漉くことが一般的です。自身の作品に和紙を使う作家さんたちが、紙漉きを体験したり自由に実験したりすることができる環境を整えるため、元給食センターをラボ化しました【写真①】」

——ここには作家の方もいらっしゃるのですね。工房を見学させていたいて、冷たくきれいな天然水と植物が原料であることに感激しました。

「昔ながらの和紙は自然から生まれて自然に帰るから、とってもしエコ。それに、和紙は弱いと思われがちですけど、非常に丈夫な素材です。絹よりも強いとされて『絹五百年、和紙千年』という言葉もあるぐらいですからね。うちでは材料の楮を育てるために、畑も作っています【写真②】」



谷野裕子（たの・ひろこ）

手漉き和紙職人。細川紙技術保持者、埼玉伝統工芸士、彩の国優秀技能者。現在、細川紙（2014年11月ユネスコ無形文化遺産記載登録）の正会員として工房「手漉き和紙たにの」を運営するほか、学校・博物館・美術館等での和紙作りの指導や講演、他産地や海外での技術指導を行う。書写素材としての和紙はもとより、ホテル、住宅、店舗の内装も手掛ける。



【写真①】工房の様子

の校長講話先生



八重尾 悟 (やえお・さとる)
 沖縄市立高原小学校・沖縄市立中の町小学校 拠点校初任者指導教員
 元 沖縄県小学校音楽教育研究会 会長
 元 沖縄県小学校音楽教育研究会 会長
 元 沖縄県中頭地区小学校音楽教育研究会 会長

本連載では、学校長を務められた先生が、これまでに学校で子どもたちに語り届けた講話をご紹介します。

第10回は、沖縄県の八重尾悟先生が北谷第二小学校で話した校長講話です。八重尾先生は、大切なことが子どもたちの記憶にきちんと残るよう、自ら曲をつくり、ギターを弾いて歌ってこられました。「耳だけでなく目でも分かり、そして音楽で心に伝える講話」を目指して子どもたちに聞かせたお話をご紹介します。

第10回 八重尾 悟 先生 (北谷町立北谷第二小学校 第14代校長)

「水車人火熱」に気を付けて命を守ろう
 友だち

定年退職して早3年目を迎え、現在は初任者指導教員として勤務し、後輩育成に努めているところです。北谷第二小学校は、教職人生として、また校長として、最後の勤務校ということもあり、これまで学んできたことを最大限に生かし「子どもたちのために何ができるか」を考えました。

その一つが、校長講話です。校長講話は、話だけではなく、主題と関連する楽曲を取り入れ、「受け身的な講話」から、歌う活動を取り入れた「能動的な講話」を工夫しました。

その中から、2つの講話を紹介します。

※パワーポイント等による資料は省略。



講話する八重尾先生。休み明けの講話「生活リズムを早く取り戻そう」



八重尾先生が作曲した学年歌を6年生に教える様子。この曲は6年生全員で作詞したもので、修学旅行や音楽朝会で歌われていた

「水車人火熱」に気を付けて 命を守ろう

児童は、学校では先生が、家庭では家の人が、それぞれ危険から守ってくれる。しかし、周りに大人がいない時は、自分を守るのは自分しかない。危険なことから身を守る意識をもってほしいという願いから『水・車・人・火・熱』という短い歌を作曲しました。夏休みに入る前に本講話を行うことにより、子ども達の安全意識を高めたいと考えました。



講話中に子どもに意見を発表させる

明日から夏休みです。夏休みは、家族と出かけたり、友だちと遊んだり、楽しいことがいっぱい待っていますね。でも、そんな楽しい夏休みも、大きなケガをしたり、事故にあったりしたら台無しになります。これから、夏休みを安全に過ごすための合言葉を教えます。「水・車・人・火・熱」[パワーポイントで文字を提示]です。みんなで読んでみましょう。

まず、「水」です。水による事故が最も多いのは7月と8月です。ちょうど夏休みにあたりますね。海や川に行ったら、必ずお家の人や大人の目の届くところで遊ぶこと。2番目は「車」です。交通事故にあわないように、交通ルールを守り、車をよく見て横断歩道を渡ること。3番目は「人」です。『いかにおすし*』を守って、知らない人にはついていけないということ。4番目は「火」です。マッチやライターで火遊びをしないこと。最後は「熱」です。この熱は、熱中症の熱のことです。暑い時は日陰で休み、水分補給をすること。この5つに気を付けて、自分の命は自分で守れるように注意しましょう。

みんなが覚えやすいように、校長先生が歌にしてきました。1回目は校長先生が歌います。短く覚えやすい歌なので、皆さんだったら、すぐ歌えると思います。

水・車・人・火・熱

水車人火熱 水車人火熱
命を守る みんなの合言葉
水車人火熱 水車人火熱



途中から一緒に歌ってくれるお友だちがいました。ありがとう。では、練習してみましょう。

[何度か練習する] では、みんなで歌いましょう。

[歌い終わった後] では、命を守る合言葉を全員で読んでください。「水・車・人・火・熱 !!」

その日の放課後、「♪水車人火熱♪」と口ずさみながら下校していく子ども達を見て、「夏休み明けは、みんな元気に登校してくれるぞ」という期待が膨らみました。

友だち

報道等で「子どもの自殺」が報じられる度に、「誰かに心の内を相談できなかったのだろうか」と、胸が締め付けられる思いがしていました。せめて支えてくれる友だちがいてくれたら、結果は変わっていたかもしれない。そんな思いから「何でも話せる、相談できる友だちをつくってほしい」という思いを込めて考えた講話が「友だち」です。



『友だちはいいもんだ』をギターで伴奏している八重尾先生

皆さんには友だちがいますか。何でも話せて、けんかしても仲直りができる、そんな信頼できる友だちがいる人は、とても幸せですね。そんな友だちを、親しい友と書いて「親友」といいます。

校長先生は高校生の時、なんでも話せるK君〔講話では実名〕という親友がいました。先生にギターを教えてくれたのも、その友だちだったのです。今は別々のところに住んでいるので、なかなか会うことはできません。でも、ギターを奏でるとその親友のことを思い出し、心が温かくなります。子どもの時にできた親友は、一生の宝物になります。これから中学校、高校、大学と進学する中で、心と心が通じ合う友だち、親友ができることを願っています。みんなが仲良く、楽しく学校で過ごしてほしいという気持ちを込めて、『友だちはいいもんだ』という曲を歌います。1番は校長先生がギターを弾きながら歌います。2番から皆さんも一緒に歌ってください。

友だちはいいもんだ

岩谷時子 作詞／三木たかし 作曲

ともだちはいいもんだ 目と目でもの言えるんだ
困ったときは 力をかそう えんりょはいらない
いつでも どこでも 君を見てるよ
愛を心に 君と歩こう
みんなはひとりのために ひとりはみんなのために
みんなはひとりのために ひとりのために

ともだちはいいもんだ 言いたいことが言えるんだ
悲しいときは はげましあおう 心はひとつさ
おとなになっても わすれはしない
夢をだいじに 君と進もう
みんなはひとりのために ひとりはみんなのために
みんなはひとりのために ひとりのために

〔歌い終わった後〕

何でも話せて、相談できる仲のいいお友だちがたくさんいる「北谷第二小学校」にしていきたいと思います。

2番の歌詞から歌いだした子ども達の歌声が、体育館いっぱいに響いた瞬間、胸が熱くなり感動したことを覚えています。さらに、友だちと力を合わせて活動している子ども達の日常の写真が、パワーポイントに映し出されると、子ども達の歌声も一層気持ちのこもった歌声になり、みんなの心が一つになったように感じました。

以上のように私は、可能な限り、子ども達が歌う活動を取り入れた「子ども達が参加する講話」を工夫してきました。これからは北谷第二小学校の子ども達が、人との関わりを持ち続け、そして自分を大切にできる、よりよい人生が送れることを願いながら本稿を閉じさせていただきます。



気持ちを込めて歌う子どもたち

上野耕平の CROSSING [クロッシング]

第11回

ありがとうMax!!



JR東日本の新幹線車両、E4系が2021年10月1日をもって引退する。増え続ける通勤客の需要に因應するため1997年にデビューした全車2階建て8両編成。愛称のMaxは先代のE1系譲りだ。

編成を2本繋げた16両編成で走る列車の旅客定員は1634人。高速鉄道としては世界最大の輸送量だ。

新幹線車両は在来線車両と比べてサイズが大きい。幅も広いので、車内も在来線と比べて1列シートが多い。ただ高さに関しては、より速く走るためになるべく低くつくるのが新幹線車両のセオリー。その方が安定性も増すし、空気抵抗も減る。しかしこのE4系はより多くの旅客を運べるよう、限界ギリギリまで高さを利用してあるのだ。そのためホームから見る停車中の姿は走る壁。正面から見るとイカのようなユニークな車両。それでも最高速度240km/hで駆け抜ける。僕自身も沢山お世話になったMaxが惜しまれつつ引退する。

文・写真：上野耕平（うえの・こうへい）

第28回日本管打楽器コンクール サクソフォーン部門において、史上最年少で第1位ならびに特別大賞を受賞。学生時代にCDデビューを果たす。2014年第6回アドルフ・サックス国際コンクールにおいて、第2位を受賞。常に新たなプログラムにも挑戦し、サクソフォーンの可能性を最大限に広げている。現在、演奏活動のみならず「題名のない音楽会」、「報道ステーション」等メディアにも多く出演している。第28回出光音楽賞受賞。昭和音楽大学非常勤講師。The Rev Saxophone Quartet、ばんだウインドオーケストラコンサートマスター。

Information

◇上野耕平コンサート情報はこちら。

<https://uenokohei.com/concert/>

（上野耕平オフィシャルホームページより）



編集部メモ

E4系は、オール2階建て新幹線電車「Max (Multi Amenity Express)」の2代目として開発され、1997年12月に東北新幹線で営業運転を開始した。先頭部分が突き出たロングノーズデザインで、運転室は航空機のようなキャノピー型になっており、標識灯は盛り上がっている。これらは空力特性を追求したためである。2021年10月1日までの24年間、定期運行を続けた。





[ワールドレポート]

World Report

音楽が育むライフスキル

貧困に苦しむフィリピンの子どもたちのために



Hiroaki Tanaka

語学留学をきっかけに、貧困に苦しむフィリピンの子どもたちへの支援を目的とするNPO法人セブンスピリットを立ち上げた田中宏明さん。元パチスロライターの経歴をもつ田中さんが、音楽を通じて子どもたちに伝えたいこととは何か。活動への想いや今後の展望について語っていただきました。

田中宏明（たなか・ひろあき）

特定非営利活動法人セブンスピリット理事長。オーケストラプロジェクト、楽器の演奏指導など、様々な音楽教育を通じて子どもたちの社会性や協調性（ライフスキル）を育むための活動に取り組んでいる。

<http://seven-spirit.or.jp>

NPO 設立の経緯とフィリピンの現状

bouquet【ブーケ】編集部（以下、b）：フィリピンで活動することになったきっかけを教えてください。

田中：20代の頃、僕は日本でパチスロライター⁽¹⁾の仕事をしていました。25歳ぐらいから東南アジアの国々を年に2〜3回旅行するようになり、そこで暮らす子どもたちや街の様子を見ていく中で、NPOや子どもに関わる海外の活動に興味をもつようになりました。30歳になる直前、「30代は別のことをしよう」と思い立ち、2011年、費用が比較的安価だったフィリピンへ語学留学することに決めたのがきっかけです。

b：留学されて2年後の2013年には既にフィリピンで音楽教室を始められていますね。

田中：たまたま僕がフィリピンで最初に出会った大学生が孤児院で鍵盤ハーモニカを教えていて、その彼と仲よくなって話をしているうちに、音楽や「エル・システム⁽²⁾」のシステムに関心をもつようになりました。実際に彼の活動を通して変化していく子どもたちの様子を目の当たりにして、音楽ができない僕に変わって、彼が主となって活動できる体制をつくらなければいいのではと考えるようになったんです。彼の指導している現場には、たくさんの日本人学生が見学に来ていて、大半の日本人はリコーダーが吹けるし、実際、彼らもリコーダーや鍵盤ハーモニカを子どもたちに教えてく

れていたもので、これだったら協力してくれる人もたくさんいるかもしれない。そういう点で、音楽はいいなと思いました。

b：フィリピンには、やることがないからという理由で盗みをしてしまう子どもがいると伺いました。

田中：僕が出会った子どもはそうでした。でも振り返ってみると、僕も高校生の頃、部活を真面目にしないで、やることがなくなったらみんなで公園に集まって悪いことをして……時間があるとそんなふうを考えてしまうじゃないですか。根本的にはそういう思考と変わらないと思います。フィリピンの小学校卒業率は約75%で、残りの25%が貧困層。中には手が足りないからという理由で学校より家の手伝いを優先させる家庭も多いんです。ちょっと外に出ればシンナーなどの誘惑があり、港近くのスラムエリアに住んでいる子どもたちの中には、船の乗降客やタクシーの運転手からチップをもらって生活している子もいます。



フィリピンのスラム街

(1) パチスロとはパチンコ型スロットマシンの略称。パチスロライターの主な業務には、取材や営業による全国回り、攻略本の執筆などがある。

(2) 1975年にベネズエラの音楽家ホセ・アントニオ・アブレウ博士によって設立された、青少年育成と犯罪防止を目的とする音楽教育プログラムの有志組織。



2012年に関東や関西の大学生による学生団体として発足し、2013年よりNPO法人セブンスピリットの主催事業として開催しているオーケストラプロジェクト

セブンスピリットの活動

b: まず「セブンスピリット」という団体名が気になったのですが、由来は何かですか？

田中: パチンコから来ています (笑)。批判の多い業界ですが、僕はそこで学んだことがたくさんあったので。

b: 現地の教室には何人くらいの先生がいらっしゃるのでしょうか？

田中: メインの先生は1人で、その他にリコーダーや鍵盤ハーモニカを教えられる若いアルバイトが5人くらい、あとはスポットで日本から教えに来てくれる方がいます。指導力のある人が専門的なことを教えているわけではありませんが、技術の向上を通じて子どもたちが精神的に成長してくれればいいなと、そういう点に主軸を置いて活動しています。

b: 音楽教室に来る子どもたちは、毎日何人くらいいるのですか？

田中: メインの拠点に百数十人、2か所の出張音楽教室に各30人はいますので、合計200人くらいでしょうか。年齢は、小学校の1年生から卒業までが原則ですが、大学生になっても来る子はいます。明確に「ここからここで卒業だよ」というのは今のところないので、フィリピンに戻ったら卒業のタイミングをしっかりと決めようかなと思っています。その上で、残りたい子は1つ上のカテゴリー (ユースオーケストラ) のようなものを設けて、他の仕事をしながら音楽にこだわれる場所をつくってあげたいですね。



合奏の様子

b: 楽器はどのように調達されていますか？

田中: 楽器はほとんどが寄付です。最初は1台の鍵盤ハーモニカしかなく、子どもたちは歌を歌うか、手拍子を打つか、ダンスを踊ることくらいしかできませんでした。それから日本の大学生が大量のリコーダーと鍵盤ハーモニカを持ってきてくれて、それがきっかけで合奏のようなことをするようになって。3~4年目くらいにはトランペットなどの管楽器を持ってきてくれる人が現れました。現在ではオーケストラを組めるくらい楽器が集まっていますが、コントラバスやチェロなどの大型低音楽器は不足しています。ヴァイオリンは岐阜県にある恵那楽器の方が、新しいものを20挺ほどくださったんですよ。

b: たくさんの日本の楽器がフィリピンで使われているんですね。

田中: いただいた楽器は日本でメンテナンスした後、フィリピンに持っていきます。現地に楽器修理専門の方がいないため、わざわざフィリピンまで来てくださるリペアマンもいるほどです。セブンスピリットはそういったいろいろな人に助けられて活動が成り立っています。壊れた楽器を香港やシンガポール、日本に送って直している人もいますが、そういうことをフィリピンで受け入れられたら仕事が増えて十分生活が成り立ちますよね。今後、楽器のリペア工房をフィリピンに作ることも将来的な考えの一つに入っています。

鍵盤ハーモニカを習う子どもたち



b: 活動の一つとしてオーケストラを子どもたちに体験させているそうですが、子どもたちがふだんクラシック音楽に接する機会はあるのでしょうか？

田中: 机をたたいて歌って踊ったり、ロックやはやりのダンスミュージックを耳にしたりすることは日常にあるようですが、クラシック音楽を聴くことはほとんどないと思います。

b: オーケストラの音楽に出会った子どもたちの反応はいかがでしたか？

田中: リコーダーだったらちょっと練習したら吹けるようになるけれど、ヴァイオリンできれいな音を出してごらんと言われても、すぐにはできないですね。そういう難しいことに挑戦して、できなかったことがちょっとずつできるようになっていく感覚は、彼らの喜びにつながっていると思います。みんなで協力して一つのものをつくるという経験もありましたことがないと思うので、オーケストラはその最たるものじゃないですか。↗



b: 選曲はどのようになっていますか？

田中: 現地の先生が決めることが多いですね。子どもたちから日本人のボランティアが喜んでくれる日本の歌を演奏したいとリクエストされることもあり、トトロなどスタジオジブリ作品の音楽はよく取り上げます。

b: 子どもたちが音楽教室にいる時間はどれくらいですか？

田中: 学校のある日は、16時ぐらいからポツポツと集まってきて17時から始めて19時半には終わって帰るという感じです。土日は朝から始めて14時頃には終わるけど、その後残って練習している子もいますね。みんな熱心に取り組んでいて、いやいや参加している子は1人もいないと思います。過去に指導に来ていた日本人の先生がおっしゃるには、学びに非常に積極的で、教えていても楽しいとのことでした。

ヴァイオリンを習う子どもたち



子どもたちへの想いと今後の展望

b: ライフスキル教育に対する想いをお聞かせください。

田中: 最初、僕らはライフスキルという言葉を知らず、たまたま僕たちの活動を見に来ていた大学の先生が、「君たちのやっている活動はライフスキル教育だよ」と教えてくださったんです。ライフスキルは子どもたちが様々な活動を通して自然に学んでいくものだと思っています。他人の考えをあれこれ押し付けることはフィリピンの子どもたちに合わないので、型にはめず自由に楽しく、それぞれの考えと個性の中でライフスキルを身に付けていってくれればいいと考えています。

b: 活動を通して、子どもたちはどのように変化したと感じますか？

田中: 責任感をもつようになり、大人になっているなと感じます。家庭や友人関係などもいろいろ影響し合っているのかもしれませんが。まともに働いたって将来どうなるか分からないような、悪事と隣り合わせの環境の中で、よく道を踏み外さずにがんばってくれているなと思います。周りの人への感謝を忘れず、親に対しても優しく。中には「セブンスピリットは僕たちが守るから」と言ってくれる子どももいて、うれしいですね、そう

いった気持ちが芽生えたことが。セブンスピリットを卒業した子が、奨学金で大学に行けるようになったことも、一つの大きな変化だと思っています。

b: これまでの活動を通して特に印象に残っていることはありますか？

田中: いちばん悪ガキだった子が、リコーダーの発表会で1番になったことです。もともと真面目な子なのでしょうね、発表会が決まってから彼が練習している姿をよく見かけていました。本番は彼だけ明らかに音が違い、1番になって最後に彼の名前を呼んだときはお姉ちゃんが泣いちゃって。おそらくこれまで認められたことのなかった彼は、みんなの前で拍手されて1番と言われ、自信になりうれしかったのでしょう、その子はそこからすごく変わりましたね。

b: やりがいやこれまで活動していてよかったと思うことについて教えてください。

田中: 子どもたちの感情を揺さぶることが僕の仕事だと思っています。うれしいだけでなく、悔しい、悲しいといった感情の振り幅をつくってあげたいと思っているので、子どもたちの様々な表情を見られたとき、活動してよかったと感じます。緊張する場を設けたいと思い、過去2回ほど日本公演を行ったこともあるんですよ。

b: 日本公演の前後で子どもたちの様子に変化はありましたか？

田中: 周りからは、子どもたちの語る夢が具体的になったと聞きました。彼らにとって衝撃的な出来事だったのでしょう。僕が25歳でサイパンに行ったときですら、ものすごく世界が広がったので、子どもたちの年齢と環境を考えればなおさらですね。

b: 日本の学生がボランティアで現地に行くこともあると伺いました。

田中: そのとおりです。日本で集まって練習してからみんなでフィリピンに行って、セブンスピリットの子どもたちと練習したり、いろいろな学校を回って演奏したりしています。しかし、それもコロナ禍でしばらく中止になっていて、例年2・3月と8・9月に行っているのですが、来年の2・3月も無理かもしれません……。

b: 田中さんはふだんフィリピンにいらっしゃるのですか？

田中: コロナ禍前までは7:3か8:2の比率でフィリピンにいましたが、2020年3月に帰国してからは一度も現地を訪問できていません。

b: コロナ禍で、現地はロックダウンが続いていると聞きました。

田中: 学校は休校になっています。一部ではオンライン授業を行っていますが、インターネット環境やパソコンもないような貧しいスラムの子どもたちが多くいて、学校にも外にも行けない、僕たちの活動にも来られないといった状況が1年半ぐらい続いています。

b: 今後の展望について伺えますか。

田中: 今は日本での活動をちょっと増やそうかなと考えています。例えば、フィリピンの子どもたちを日本に連れてくるとか、国内インターン生を募って楽器の

寄付を呼びかける活動や広報活動を行うとか。活動の根本を見直すよい機会になるとも思っています。また、日本での活動以外に、現地で音楽と関わりながら仕事に直結することが学べる専門学校のようなものを開校できないかということも検討中です。例えば農業とか漁業とか、子どもたちが音楽に限らず多方面で活躍できるように、将来の選択肢を増やし、サポートできる環境をつくれれば良いと考えています。

b: 若者に向けて、メッセージがあればお願いいたします。

田中: 難しいことを考えず、まずはやってみることがいちばん大切。思っていることをそのままにしておくのではなく、まずは行動に移してみる。それでダメならやめればいい。サポートしてくれる大人はきっと周りにいるはず。できないのがあたりまえなので、できないことはできる人に頼りながら、自分のやりたいことにどんどん挑戦していったらいいと思います。



日本公演

Interview

セブンスピリットの活動に携わる中学校教諭の前所麻里江先生に、コメントをいただきました。

前所先生はインターネットを通してセブンスピリットを知り、その活動に共感したことをきっかけにスタッフとなって、フィリピンの子どもたちを支えています。

「音楽って楽しい!」「表現するってうれしい!」さらには、「人と合わせること、聴いてもらうことは幸せなこと!」……そんな思いを抱きながら、子どもたちはセブンスピリットで活動しています。

自分のすなおな気持ちをのせて表現する子どもたちが奏でる音楽には、目に見えないたくさんの思いや願いが詰まっているように感じられます。

きっかけは音楽。しかし、子どもたちは音楽を通じた活動から、自分自身の世界を広げていきます。周りとなつがり、自分を見つめ、そして将来について憧れを抱き、夢を見ることの楽しさを感じていきます。

現在はコロナ禍で活動がストップしていますが、子どもたちにとって一つの居場所となっているセブンスピリットで、音楽を通して自らを解放し表現することのできる日が、一日でも早く訪れることを願っています。

セブンスピリット スタッフ 前所麻里江 (松本市立菅野中学校 教諭)



前所麻里江先生(写真左)と
フィリピンの子どもたち

One day, [ワンデー ワンモーメント] one moment

フォトエッセイ

写真・文：ヒダキトモコ

Photo・Text：Tomoko Hidaki

13 枚目

人のぬくもり

かつて訪れた、パリのシテ島にあるサント・シャベルという教会。観光名所としても有名で、その日も教会内に多くの人がいたが、その広い空間全体が、重い静寂に包まれていた。

四方を取り囲むようにそびえるステンドグラスの前行き、下から見上げてみる。この壮大な芸術作品は原色に近い鮮やかな発色だが、しかしどこか控えめな色合いで、様々な色それぞれが喧嘩せず、

引き立て合っているような、不思議な調和を感じさせるものだった。じつと見つめていると、ふと、一つ一つのガラスに丁寧に色を付ける職人たちの想いを感じた。時空を飛び越えて一人一人のぬくもりを感じる瞬間だった。時が経っても、あの身体が震えるような、熱い力が湧いてくる感覚は、ずっと心から消えないままだ。



ヒダキトモコ

フォトグラファー。日本写真家協会(JPS)、日本舞台写真家協会(JSPS)会員。
米国で幼少期を過ごす。慶應義塾大学法学部卒業。人物写真とステージフォト
を中心に撮影。ジャケット写真、雑誌の表紙・グラビア、各種舞台・音楽祭の
オフィシャル・フォトグラファー。官公庁や経済界の撮影も多数。
<https://hidaki.weebly.com> Instagram: tomokohidaki_2



Contents

- 04 [連載] 日本めぐり 第6回 谷野裕子(手漉き和紙職人)
- 06 [連載] 次代につなぐ 校長先生の講話 第10回 八重尾 悟
- 09 [連載] crossing 第11回 上野耕平
- 10 [連載] World Report vol.10 貧困に苦しむフィリピンの子どもたちのために 田中宏明(セブンスピリット)
- 14 [連載] フォトエッセイ One day, one moment 13 枚目 ヒダキトモコ

編集後記

『bouquet[ブーケ]』No.13をご清覧いただき、ありがとうございます。
「日本めぐり」に登場した谷野裕子さんは、朗らかで明るい方でした。取材中に見せていただいた和紙製の分厚い大福帳(売買の勘定を記入する元帳)や、三味線の胸掛けなどは、実際に持ってみると驚くほど軽く、さらに強度も十分だそうです。日本の技術のすばらしさを感じました。
「World Report」で紹介した田中宏明さんは、軽快なフットワークでプロジェクトや活動を展開させています。常に優しい笑顔の田中さんに、フィリピンのスラム街の子どもたちが温かく見守られていることが分かります。
お忙しい中、取材や執筆、編集にご協力賜りました全ての方に、心より厚く御礼申し上げます。

staff

Art Direction & Design(表紙・本文): 中澤美羽

DTP: 清新社 / 印刷: 新日本印刷

製本: ヤマナカ製本

No.13

<https://www.kyogei.co.jp/>

bouquet [ブーケ] 発行者: 株式会社 教育芸術社(代表者 市川かおり) 〒171-0051 東京都豊島区長崎1-12-14



Tel. 03-3957-1175(代) Fax. 03-3957-1174 ©2021 by KYOGEI Music Publishers. ©-21 本書を無断で複写・複製することは著作権法で禁じられています。

『友だちはいいもんだ』(岩谷時子 作詞/三木たかし 作曲) JASRAC 出 2108480-101